

# 日本海中部海域におけるマイワシ資源

## —増加期における漁況の特徴—

安達辰典\* (福井県水産試験場)

### 1. はじめに

マイワシ資源は昔から大規模な増減を繰り返しており、近年では 1930 年代と 1980 年代に豊漁期となった。日本海中部に位置する福井県の漁獲量も全国の動向と同じく、統計資料でみると 1950 年代と 1980 年代に豊漁期となった。

1990 年代以降は殆ど漁獲されない状況が続いていたが、昨年は鳥取県沖でまとまった漁獲があり、福井県においても散発的ながら水揚げがみられ、増加期に向かう傾向が伺われる。そこで、直近の豊漁期である 1980 年代の漁況の特徴について、その前後の増加期と減少期に注目して振り返り、今後の増加期における調査の参考になればと思う。

### 2. 浮魚類 (マイワシ、マアジ、サバ類) の漁況

福井県のマイワシ、マアジ、サバ類漁獲量の 1957~2003 年における経年変化を全国の推移と比較してみると、3 種ともに全国の変動と同じ変動を示した。ただし、マイワシ漁獲のピークは全国および日本海西区と一致しなかった。これは、市場の受け入れ体制 (冷凍庫容量等) により漁獲を制限した影響が考えられる。3 種の変動には、マイワシ→マアジ→サバ類→マアジへと明確な魚種交代現象が認められた。これらの魚種の交代に伴い、若狭湾における 3 種を対象にした漁業も、中小型まき網全盛期、小型まき網漁業の衰退、大中まき網主体、大中まき網の衰退と変遷し、現在は定置網主体になっている。漁獲対象魚種の資源変動が、魚価、漁獲量、経営コスト等により漁業に及ぼす影響が見受けられる。

### 3. その他の魚類の漁況

いくつかの回遊性の魚種について福井県における漁獲量の経年変化を示し、日本海西部海域のマイワシ漁獲量が減少に転じた 1989 年をキーに検討してみた。

カタクチイワシは、全国の傾向と同じ増減傾向を示しマイワシの変化とは対照的な関係が認められた。なお、福井県の 1990 年代後半の減少は大中まき網の衰退の影響と考えられる。ブリ類も変動傾向は全国と類似し、1989 年に最も少なくなり、以降はやや水準が高くなった。餌をマイワシに依存する傾向のあるタチウオは、マイワシの増減と似た傾向がみられるが、ピークは一致しなかった。トラフグについてもマイワシと同様の増減傾向がみられ、1989 年がターニングポイントとなっていた。ケンサキイカについては、増減傾向はマイワシと逆相関の傾向が伺われた。

### 4. 漁場環境 (水温・プランクトン)

太平洋系群では寒冷・温暖レジームとマイワシの増加・減少が同期することが示されている。

福井県の地先水温の最高・最低水温の経年変化は、年最低水温が1985～1989年にかけて順次高くなり、1989年がターニングポイントとなっていた。

福井県地先のプランクトン湿重量の経年変化は顕著とは言えないが、3～5月について1989年以降は増加傾向が伺われた。

#### 5. 今後の課題

マイワシ資源変動機構の解明は、魚種交代現象の解明につながるもので、前回の増加・減少期には無かった幾つかの魚種交代に関する仮説が提唱されている。また、調査機器の能力向上も比較にならないものと考えられる。

マイワシ資源の増加期に向けて、仮説の検証につながる海洋環境・餌料環境・マイワシを含む仔稚魚の分布・捕食状況などの調査をプロジェクトチームで広範囲に展開していく体制整備が必要と考える。

\*現所属：福井県内水面漁業協同組合連合会